

値は122~2,895 IU/l (平均490.8 IU/l)であった。一方、S群では95~289 IU/l (平均181.0 IU/l)であり、有意にS群でP-アミラーゼ値は低かった ($p < 0.05$)。また重症化例は1例もなかった。腹痛を有したものは、nS群では13例 (40.6%)、S群では5例 (15.2%)で有意差を認めた ($p < 0.05$)。ステントの脱落する期間は、1~14日 (平均2.7日)で膵管径とは無関係であった。ステント長別では、留置後すぐの脱落がステント長2cmで認められたが、4cmおよび3cmでは認めなかった。

【結論】 自然脱落型膵管ステント留置により、ERCP後膵炎を予防できる可能性が示唆された。

PA-10.

CT virtual ultrasound を用いた、肝癌のRFA 穿刺・焼灼の術前シミュレーション

(大学院単位取得・内科学第四)

○工藤 幸正

(内科学第四)

宮田 祐樹、平良 淳一、杉本 勝俊
目時 亮、古市 好宏、釜本 寛之
清水 雅文、山田 昌彦、横井 正人
堀部 俊哉、森安 史典

【背景】 肝癌に対するラジオ波熱凝固療法 (RFA) は侵襲が低く、簡便に治療ができることから、近年、急速な拡がりをみせている。また大型肝細胞癌に対しても治療適応は拡大しつつある。このRFAの有効性と安全性を高めるには、正確な穿刺と合併症を回避するための治療支援画像システムの構築が必要である。

【目的】 我々は経皮的超音波ガイド下の治療支援画像システムとして、CT virtual ultrasound (CVUS) を東芝メディカルシステムズと共同開発した。これを用いて、肝癌局所療法の術前治療計画と、穿刺・焼灼のシミュレーションを行い、その有用性を検討した。

【対象と方法】 対象は平成16年6月から12月までにRFAを施行した、肝癌51症例、66結節 (直径0.8cm~8cm)であった。CTの3Dデータから、任意の超音波断層面に相当した画像を作成し、肝癌の穿刺焼灼のシミュレーションを行った。

【成績】 評価項目は、1) C面を使って、穿刺シミュレーションを行い、至適穿刺ルートを決めることが可能か、2) 腫瘍中心を固定点として、360度回転する

MPR (中心点ロック) により、焼灼する腫瘍の近接臓器・脈管の3次元的な把握をすることが可能か、3) 焼灼のシミュレーションによって、脈管や隣接臓器の障害を回避する、焼灼の中心と範囲の決定が可能かである。

1) では、51例中35例 (69%) で穿刺ルートの変更、決定に有効であった。2) では、51例中50例 (98%) で脈管や隣接臓器の把握が可能であった。3) では、51例中45例 (88%) において脈管や隣接臓器の障害を回避して、焼灼中心と範囲を決定する補助となった。

【結語】 CVUSはCTデータのみで、簡便に肝癌局所治療をシミュレーションすることが可能であった。この術前シミュレーションにより、肝癌局所療法の安全性を向上させることが期待された。

PA-11.

ペプシノゲン法と胃粘膜萎縮および腸上皮化生の検討

(内視鏡センター)

○片岡 幹統、河合 隆、山岸 哲也

(内科学第四)

宮崎 郁子、八木 健二、川上 浩平
平良 悟、糸井 隆夫、森安 史典

(外科学第三)

高木 融、青木 達哉

(病理診断学)

松林 純、向井 清

【目的】 胃癌のスクリーニング検査として使用されているPepsinogen (PG) は本来胃粘膜の萎縮および炎症の程度を反映する指標である。しかしながらこれまでにPG法と組織学的所見の関連を検討した報告は少ない。今回我々は、*H.pylori* 抗体検査と合わせ、PG判定を以下の4群に分類し、組織学的所見に差があるかどうかを検討した。

【方法】 対象は初回内視鏡検査とともにPG及びHP抗体を検査した363例である。内視鏡検査では前庭部大弯 (AGC)、体上部大弯 (BGC) および体中部小弯 (BLC) から胃粘膜を採取し、組織所見を検討した。組織学的所見はUpdate Sydney Systemに準じてnone、mild、moderate、markedに分類し、スコア化した。同時に採血し、IgGHP抗体価およびPG値を測定した。A群: HP陰性・PG陰性、B群: HP陽性・PG陰性、